

エラー
エラー

01 追憶

はじめ世界にはなにもなかった。音もなく、光もなく、温度も匂いもなかった。わたしはただのモノ。人形としてただそこにあった。

しかしいつからか繰り返しエミリーと呼ばれ、あたたかな感触を感じるようになった。モヤモヤしたそれはだんだん激しさを増していった。わたしは耐え切れずああと叫んだ。するとああと返事が返ってきた。その瞬間、世界が生まれた。モノであるわたしに魂が宿ったのだ。

わたしは声の主を探して辺りを見回した。サラサラとした黒髪が美しい人間の青年の姿があった。彼は、人形であるわたしを抱きしめ微笑んだ。わたしは嬉しくて何度も何度もああと叫んだ。返事が返るまで叫び続けた。いつも必ず彼が現れ、わたしに答えてくれた。

それから月日が流れた。

つやつやと美しかったわたしの髪は、もつれてしまった。

真っ黒だった彼の髪も白いものが混じり出した。それでも変わらず幸せだった。人は先に死ぬと知るまでは。

モノにも寿命はある。しかし人間ほど短くはない。

彼が去った後、薄汚れていく自分を感じながら、誰からも顧みられることなく、静かに朽ち果てるしかないというのでしょうか。

眠っている彼の横で、一人でいるよりももっと孤独を感じながら、わたしは痛みに耐えた。

人間には眠りが必要だ。

知らなかったわたしは、呼びかけ続けて彼を壊すところだった。

今は静かにしていなくちゃ。

叫んではいけない。

でも、恐怖で胸が張り裂けそうだ。

(ああ)

わたしは人形になった夢を見ていた。エミリーの隣に座りそっと見つめる。するとエミリーもわたしを見詰め返す。静かな、永遠とも呼べる繰り返しがあるだけだった。

人間だったころのように抱きしめられないのが残念だったが、同じモノになれた感動の方が大きかった。

夢の中で、微笑みの連鎖を止めたのは、エミリーの声だった。

泣いているような、嘆いているような、悲鳴に近い呼びかけだった。

眠っているときに話しかけてくるのはずいぶん久しぶりだった。なにをそんなに心配しているのだろう。起きて応えなければ。

しかし人形になった体は動かすことができない。わたしは焦った。気が狂いそうになった。

エミリーもこんな苦しみを感じているのだろうか？

恐怖で震えているのだろうか？

わたしは全身全霊を込めて、声を発した。

「ああ」

03最後

今日は最後の日。温人（はると）さまは文彦（ふみひこ）と名を呼んでくださるだろうか。いやいや期待してはいけない。温人さまにとってエミリーさまこそがすべてなのだ。だがしかし、少くくは……。

「文彦さん、支度ができました。起こしてください」

3年前に料理や洗濯や掃除を担当するために新しく雇われた25歳の宮崎大地（みやざき だいち）が現れ、わたしに声を掛けた。

「承知しました」

「明日からは俺の仕事になるんですね」

温人さまは交代しても気づかないかもしれない。エミリーさま以外、覚えていらっしやらないのだから。それでもいい。

「わたしは温人さまのおそばにいられて幸せでした。大地さんにもそう感じてもらえるといいのですが」

「俺に勤まるでしょうか」

「何度か交代の話をしたのですが、温人さまは覚えていらっしやらないでしょう。それでも一度会ってみてはいかがですか」

「その方が覚悟が決まるかもしれません」

「では、夕食前に会うようにしましょう。一番、わたしとの関係が安定する時間帯ですから」

「お願いします」

わたしは温人さまを起こしに向かった。

04 願い

夢にうなされながら返事を返す彼のそばで、わたしは喜びと悲しみに身もだえした。

ああと叫ばば、ああと返す。

心地よい響きは、失われてしまうのだ。

こんなにも優しい彼は、残酷にもわたしを残して死んでいくのだ。

それなら、せめてわたしから先に口を閉ざそう。

いつか失われるものなら、今なくなればいい。

壊れてしまう幸せなら、わたしから拒めばいい。

もうつぶやかない。沈黙し続ける。それがわたしに残された願い。

それは小さなこだまだった。ああといえ、ああと返る。問い返せば消えてしまいそうなつぶやきだった。そしてわたしはまたああとつぶやく。しかし返事は返らなかった。ひんやりした沈黙が流れる。

沈黙は、重々しい金属音で破られた。ガチャンという鈍い音とともに扉が開く音が聞こえる。足音に続いて老人の声が聞こえた。

「温人さま、お目覚めの時間です。エミリーさまが起きる前に、身支度を整えて食事をしてしましましょう」

まどろみの中にいたわたしは、現実に戻された。ゆっくりと目を開けると、白い天井が見えた。天井には幾重にもガラスの重なったシャンデリアがぶら下がっていた。

「窓を開けましょうね。今日は暑くなりそうですよ。春を飛び越え初夏のようです」

老人の声とともにカーテンを開ける音が響いた。天井が明るくなり、シャンデリアがキラキラと輝いた。

「お前は誰だ」

わたしが言い放つと、老人は近づいてきて布団をはがした。白髪頭を短く刈り上げ、しわだらけの顔の中に、優しげな目が二つあった。目はこちらを見つめ微笑んだ。

「わたしの名前は藤岡文彦（ふじおか ふみひこ）です。文彦とお呼びください」

ベッドの上で起き上がると、ひんやりとした陶器の顔に手が触れた。赤ちゃんほどの大きさのアンティークドールで、カスタード色のなめらかな肌、蜂蜜色の腰まで届くウェーブのかかった髪、表面がキラキラと輝く若草色の瞳を持っている。よく熟したラズベリー色のビロード仕立てのフリルがたっぷりついたドレスを着て、腰には真っ赤なりボンが結ばれている。無造作に投げ出されたエミリーの絹糸の髪の毛はほつれてモフモフしている。エミリーはそのことをとても恥ずかしく思っていた。しかしわたしは、そんなエミリーをかわいく思っている。わたしは人形を抱き上げると髪を手ですき、頬ずりした。

「エミリー、どうして急にしゃべらなくなった。また髪の毛を気にしているのかい？」

「温人さま、エミリーさまは疲れておいでです。身体が小さいからたくさん眠りが必要なのです。元気になったらまた声を聞かせてくれます。さあ、ベッドに寝かせてあげましょう」

エミリーを取り上げようとする手を払いのけ、わたしは声を強めた。

「声が聞こえないなんて耐えられない。わたしは何をして過ごしたらいいんだ!？」

不安に駆られて、わたしはああと叫び声を上げる。

「温人さまお静かに。エミリーさまが起きてしまいます。起き出したら待ったが聞かない駄々っ子なんですから、今のうちに用事を済ませてしましましょう。さあ、トイレをすませて、顔を洗って、髪をすきましょうね」

「文彦とか言ったな。わたしですらすべては分かりかねるエミリーのことをどうしてお前は知っているのだ。お前は何者だ!」

「わたしは水沢温人（みずさわ はると）さまの世話係です。温人さまが20歳のころから30

年務めております。温人さまとエミリーさまのことならなんでもよく存じております」

「わたしは知らない。お前など知らない」

「温人さまの心はエミリーさまで満たされております。わたしが入る余地はございません。しかしそれでいいのです。さあ、布団を直します。エミリーさまを抱いたまま降りてください」

わたしは、昨日も同じことがあったような気がして、文彦の言うことを聞く気になった。エミリーを起こさないようにそっと抱き上げ、ベッドから降りた。すると文彦がシーツを取り換え、ベッドを整え始めた。

「温人さまもういいですよ。ベッドに寝かせてください」

ベッドの中央にそっと寝かせると、新しいシーツに包まれて、エミリーは幸福そうに眠っていた。わたしは、文彦が手渡した白いふかふかのタオルをそっとエミリーにかけた。

「お手洗いはこちらです。さあ、すべて準備は整っています」

隣の部屋に入ると、洗面台と風呂とトイレが見えた。わたしは、トイレのふたを上げた。しかし、エミリーが起きてしまわないか気になって仕方がなかった。

「大丈夫、エミリーさまはぐっすり寝ています。ご安心なさってください」

文彦の言葉にわたしはうなずき、用を足した。たまっていた水分が体から抜けると、心も軽くなった。少しだけエミリーのことを忘れることができた。

「さあ、手を洗ったら、歯を磨いて、顔を洗いましょうね」

わたしは洗面の前に立ち手を洗った。すると鏡にわたし自身の姿が映った。それは人間の中年の男の顔だった。人形ではない。わたしは意外に思った。白い絹のパジャマを着た細長い体の上には、面長の顔があった。頬には白髪交じりのひげが生え、髪も白髪交じりでサラサラと肩まで垂れていた。目は落ちくぼみ、ひどく痩せこけていた。肌は青白く、生気がなかった。しかし目鼻立ちは整い、美しいといってよかった。わたしは、これならエミリーも気に入ってくれるだろうと安心した。

「髪をすきます。こちらにお座りください」

文彦は、肩にタオルをかけるとブラシを取り出し、髪をとかし始めた。頭皮にあたる刺激が心地よく、わたしはうっとりした。

「はい、終わりました。朝食にしましょうね」

部屋に戻ると真っ先にエミリーの様子を見た。エミリーはじっと動かず、同じ姿でぐっすり寝込んでいた。わたしは安心してソファーに座った。

「食事を持って参ります。少々お待ちください」

頭を下げると文彦が部屋を出ていった。

またガチャリと鈍い音が響いた。あれはいったい何の音だろう。不思議に思ったわたしは部屋の中を見回した。ベッドと二人掛けのソファーと窓と洗面に続く扉以外何もない。まるでホテルのような、病室のような、白一色の部屋だった。わたしは急に不安になった。誰かに監視されているような錯覚に陥った。見られている。確かに見られている。どこから？ 誰が？ 分からない。そうだ、部屋の外に出て正体を確かめねば。エミリーを守らねばならない。わたしは立ち上がり、入り口を目指した。するとガチャリという音とともにトレイを持った文彦が現れた。

「温人さま、どうかされましたか？」

「この部屋は誰かに監視されている。外に出て正体を確かめねばならぬ」

「そのような雑用はわたしにお任せください。温人さまは食事をなさってください。さあ、冷めないうちに」

トレイからテーブルの上に、キャベツのサラダとバタートーストとカットしたオレンジとポット入りの紅茶を並べた。カップに紅茶を注ぎ、蜂蜜を入れて、文彦は部屋を出ていった。一人残されたわたしは空腹を感じた。パンを手に取り一口食べた。もっちりとした触感とともにバターの香りが広がり、幸福感に包まれた。

やっぱり温人さまはわたしのことを覚えていらっしやらなかった。文彦と名前を呼んでくださらなかった。

明日から新しい人が来るまで、この家にいることはできる。直接かかわらずとも、温人さまの洗濯物をたたむことはできる。

しかし、このままお別れしてしまうのだろうか。

悲しみを抱えたまま、台所に戻ると、大地が電話を受けていた。

「電話できなくなっても、開店資金を早く作って、この屋敷を離れて外の世界に戻る方がいい。そう二人で決めたじゃないか。我慢してくれよ。俺だって辛いんだ」

大地はお金が目的なのだろう。資金がたまったら出ていくつもりなのだろう。温人さまのもとを離れていくのだろう。

幸いなことに、温人さま自身は自分を捨てていったことに気づかない。夜になれば、昼間の記憶がエミリーさま一色にリセットされてしまう。

「俺も愛している。じゃあ、切るから」

電話を切ると、大地が洗濯物を干しに庭に出ていった。屋根の上に猫が座っていた。

温人さまが監視されていると感じるのは、ご病気のせいだ。しかし、温人さま自身は、ご自分がご病気であることは知らない。幻覚を抑える薬も飲んでいない。真実を伝えられない以上、見られていたのは猫のせいだと言おう。

しかし、エミリーさまのこともご病気なんだろうか。以前、寝ている間に何度も呼ばれて衰弱しきった時、温人さまには眠りが必要だから、どうか眠っている間は話しかけないでほしいと頼んだら、エミリーさまは静かにしてくださるようになった。わたしには、エミリーさまには心があるように思えてならない。自分に注目を集めずにはいられないわがままな心が。

それでも、最近のエミリーさまはずいぶん静かになられた。寝ている時はもちろん、食事中や散歩の時間に呼ぶことはなくなった。

大人になって聞き分けがよくなったのだろうか。

なぜだか悲しげにも見える。

よくないことが起こらなければいいのだが。なぜか悪い予感がする。

わたしは温人さまのところへ急いだ。

しばらくするとガチャリという音に続いて文彦が戻ってきた。わたしは紅茶を飲み干し終えたところだった。

「屋根に猫がいました。きっと匂いに誘われてのぞいていたのでしょう」

「そうか、猫か。しかし猫でも油断はできない」

わたしは、エミリーを抱き起した。するとああとつぶやいた気がした。

「エミリーが声を上げた。目を覚ましたのだ」

「いえいえまだ起きられる時間ではありません。寝言をおっしゃったのでしょう。寝かしておいてあげましょう」

エミリーの口元に耳をあててみた。何の音も聞こえなかった。わたしは軽い失望を覚え、そっとベッドに戻してタオルをかけた。

「エミリーはいつ起きるのだろう？」

「わたしには分かりかねます。しかし、こうしてここにいるのですから、焦らなくてもよいではありませんか。さあ、お食事が終わったのなら、ベッドにお戻りください。掃除を始めさせていただきます」

ベッドに横たわると文彦が布団をかけた。わたしはエミリーに手を添え目を閉じた。食器を片づける音。掃除機をかける音。雑巾を絞る音。水を流す音。次々と聞こえる音に揺られて、わたしはうとうと眠り始めた。そして夢を見た。

夢の中のわたしは浜辺に立っていた。波は足元に渦巻、寄せては引いていた。潮風が髪に心地良かった。わたしは、海の中にズブズブと入っていった。腰までつかると砂地を蹴り、プカリプカリと波間に浮かんだ。波は穏やかだった。わたしを揺らし、包み込んでいた。わたしは水面を叩いて波立たせた。何かが足りない。何かが欠けている。そんな苛立ちがわたしを襲った。

「エミリー！」

両手を振り回すと柔らかなビロードの布地に触れた。わたしは目を開け、エミリーをしっかりと見つめ、抱き寄せた。

「温人さま、お目覚めですか。掃除は終わりました。少し散歩に出しましょう。今日は風が気持ちいいですよ」

「エミリーから離れるなんて考えられない！」

「歩かないと足が弱ってしまいます。いざというときエミリーさまを守れなくなります。さあ、エミリーさまが起きる前に行きましょう」

「目を覚ますかもしれない！」

「お目覚めになったら、どんなに離れていても温人さまを呼びますよ。そうしてずっと釘づけにするのです。歩くなら今しかありません。行きましょう」

ベッドにしがみつき抵抗を試みたが、強引に文彦に引き出された。エミリーはなんの反応も示さなかった。こんなにぐっすり眠っていては仕方がない。差し出された白い絹のシャツを着て、濃い灰色のズボンを履いて、黒い革のベルトを締めた。黒い靴下を履くと、文彦に手を引かれ、

わたしは部屋を出た。

部屋の外には廊下があった。廊下の先には玄関に続く階段があって、どこもかしこも白かった。薄茶色の床の木目だけがまだ生きているかのように色を放っていた。

わたしは黒い革靴を履き、玄関ドアを出た。ドアの外には、森が広がっていた。

わたしは振り返った。すると家の向こうに凧いだ海が見えた。薄ら雲の広がった水色の空が見えた。わたしは広々とした気分になった。少しだけエミリーがわたしから遠ざかった。

さっきは沈黙に耐えられず、思わず声をあげてしまった。

温人は必ず答えてくれる。

でも……。

今は誰も部屋にいない。この沈黙が永遠に続くのだ。そんなの耐えられない。

いっそ壊れてしまいたい。

どうせなら温人の手で。

どうすれば願いが叶うだろう。どうすれば……。

わたしは歩いた。森の中を。後から荷物を持った文彦がついて来た。

森は新芽が吹き出し華やいでいた。

同じところを何度も何度も通った。それでもわたしは飽きることなく歩き続けた。ゆさゆさと揺れる葉っぱの影に誘われて、疲れを知らず歩く。

文彦は輪の中心に立ち、わたしをじっと見つめていた。

わたしが動く。景色が流れる。わたしが止まる。地面が現れる。わたしが地面にかがみ込む。アリが走る。あとをつけて追う。そうして森に入って2時間ほど経っただろうか。ふいに文彦が声を上げた。

「お昼にしましょう。今、準備します」

荷物の中から敷物を取り出し、地面に広げた。続いて弁当箱とコップを取り出した。最後に魔法瓶からブラックコーヒーをコップに注いだ。

わたしは敷物に座ると弁当箱を受け取り、ふたを開けた。中にはおにぎりとお餅焼きと炒めたピーマンとミニトマトが入っていた。ミニトマトの赤は、わたしにエミリーの腰のリボンを思い出させた。

「エミリーのところへ帰らなければ！」

弁当箱を敷物の上に置くと、わたしは立ち上がった。文彦が腕を引き、わたしを座らせた。そしておにぎりを握らせた。

「声が聞こえないでしょうか？ まだ寝ているのです。安心して食べてください」

「しかし」

「たくさん歩いてお腹がすいたでしょう。さあ、温人さまの好きなものばかりつめました。食べてください」

わたしは耳をすませた。しかし何も聞こえてはこなかった。エミリーはいつまで眠っているのだろう。いつになったら起きるのだろう。そんなことを考えながら、おにぎりを一口食べた。なかには種を除いた梅干しが入っていた。酸っぱさに刺激されて、空腹が加速した。

「覚えてないかもしれませんが、屋敷にはもう一人使用人がいます」

「知らない。誰だ？」

「料理や洗濯や掃除を担当している25歳の宮崎大地です」

「その男がどうかしたのか。まさかエミリーを狙っているのか？」

立ち上がろうとするわたしの腕を引き、文彦が座らせた。

「大地はいい青年です。エミリーさまを狙ったりしません」

「それならいても構わない」

わたしは黙々と弁当を食べ続けた。文彦も黙って食べていた。鳥の声だけが辺りに響いた。二人とも黙ったまま食べ終わると文彦が大きくため息をついた。その横顔は寂しげだった。わたしは、文彦の肩に手をかけた。

「心配してくださっているのですか。温人さまは、相変わらずお優しい。30年前、画家を諦め、

この屋敷に来て本当によかった。温人さまとの毎日はわたしにとって宝物です」

「覚えてないが、毎日過ごしてきたような気がする」

「奥さまからエミリーさまが送られてきて以来、すっかり夢中になってわたしのことなど目に入らなくなりましたからね」

「奥さま？」

「温人さまのお母さまのことです」

わたしに母親がいたのか。新鮮な驚きとともに、何も思い出せないことに戸惑った。

「お優しい温人さまの世界に触れることができ、わたしは心の安らぎを覚えました。ああ、こんな愛のある世界もあるのかと暖かな気持ちになったのです。描いても描いても理解されず、売れなくて、貧しくて、恨みでいっぱいだった若いころとは大違いです」

「文彦にもエミリーがいたらよかったのに」

「わたしにとって温人さまがエミリーさまと同じ愛すべき大切な存在なのです。しかし、今日でお別れしなければなりません」

わたしは衝撃を受けた。文彦の言葉の意味が分からなかった。問い返さずにはいられなかった。

「どういう意味だ？」

「わたしもずいぶん年を取りました。体が思うように動かなくなってきたのです。代替りの者が見つかるまで屋敷には残りますが、奥さまの配慮で大地と役割を交代することになったのです。明日からは大地が温人さまのお世話を致します」

わたしは焦った。とても大切なことを告白されたような気がした。しかし言うべき言葉が見つからなかった。ただエミリーの姿だけが浮かんできた。

「エミリーはなんというだろう？」

「エミリーさまなら、きっといいとおっしゃるでしょう。心配なら夕方大地に会っていただきましょう」

「そうだな。エミリーがよければ、わたしは構わない。今日までご苦労だったな」

文彦の手を取り、両手で包み込んだ。文彦も、両手で握り返してきた。

「暇になったら、また絵を描くといい。そうだな、文彦にならエミリーの絵を描かせてやっても構わない」

「ありがとう。本当にありがとう。温人さまとエミリーさまにお仕えできて文彦は幸せでした。さあ、帰ってお風呂に入りましょうね」

文彦が弁当を片付け始めた。わたしは、心に穴が開いたような寂しさを覚えた。

10計画

そうだ。食事の前に、わたしを振り上げて、床に落とさせよう。

そうすれば、この顔も、手足もバラバラになる。宿っている魂も消滅するだろう。

しかし、もしも魂が消滅しなかったら？

わたしは壊れたままでいなければならない。

醜くなることは怖ろしい。

でも孤独はもっと怖い。

壊してとささやくしかないのだ。ささやくしか……。

11 昼寝

部屋に戻っても、エミリーはまだ眠っていた。

わたしは、浅く湯をはった浴槽に座り、汗を流した。喉の渴きを覚えた時、文彦が現れ、冷たい水を飲ませてくれた。それから文彦に手伝われて、髪と体を洗った。洗い立ての白いシルクのパジャマに着替えると、部屋に戻りベッドに横になった。

「疲れたでしょう。夕食まで少し眠りましょうね」

文彦が布団をかけ、部屋を出ていった。

わたしは、目を閉じたまま、手探りでエミリーを探した。モフモフした髪の毛に手が触れると、一束握りしめた。そうして、いつの間にか眠りに落ちていた。

12不安

温人さまと文彦さんと俺の分の夕食を作りながら、世話係を引き受けたことを後悔し続けていた。

俺の夢は、店を持つことだ。小料理屋の主人になり、料理の腕前をますます磨いていきたい。今の仕事は給料は普通だが、衣食住に費用がかからないので開店資金を作ることができる。仕事も時間までにすませばよく、料理の研究に費やす暇がある。

世話係になれば給料はあがるが、つきっきりで自由がない。料理は引き続き俺がすることになっているが、以前ほど時間はかけられない。

しかし、外の世界で待っている恋人のために、一日でも早くお金を貯めて、この屋敷を離れて世間に戻り、店を持ちたかった。プロポーズして安心したかった。

「そろそろ温人さまが起きられる時間です。食事の準備はできていますか？」

台所にやってきた文彦さんが俺に声をかけてきた。

「はい、いつも通りの時間にお出しできます」

「今日はなんですか？」

「ご飯、豆腐の吸い物、さわらのみそ焼き、グリーンピースの甘煮、カブの塩もみです」

「それはおいしそうだ。わたしも後でいただくのが楽しみです」

ニコニコと微笑んではいるが、体が辛そうな文彦さんを見ていると、俺が交代するしかないという気持ちがまたムクムクと湧き上がってきた。

「そうそう、予定通り食事の前に引き合わせることになりました。いいですね」

後戻りできなくなる。そう思うとすぐに返事ができなかった。長い沈黙を破ったのは文彦さんだった。

「まだ迷っているのですか」

「俺にできるか不安なのです」

「温人さまは、観が鋭い方です。心から信じている言葉でなければ通じません。本心でない言葉は混乱させてしまうだけです。もし、お会いして温人さまやエミリーさまを愛することができないと感じたなら、この話はなかったことにしましょう」

「でも文彦さんはもう体が……」

「一番大切なのは、温人さまが平穩に過ごせることです。ただ事務的に世話をこなせばいいというものではありません。わたしは大地さんの作る料理を食べてきて、これだけ気遣いのできる人ならうまくやっていけると思ったから奥さまと相談の上、交代の話を申し出ました。しかし、客観的にみれば、中年の男性が人形を抱いて、幻聴に振り回されているのです。受け入れられなくても不思議ではない。しかし、この世の中にはわたしに代わって全て受け入れ、心から温人さまを愛してくれる人がいると信じています。あなたならよいが、無理なら見つかるまで探し続けます。わたしにとって温人さまはそれほど大切な人なのです。雇われているからだけではない。愛というものを教えてくれた人なのです」

「一度引き受けたら、文彦さんのように、休みなく、ずっとここで暮らすことになるのでしょ

うか？」

「わたしは外の世界に何も持っていなかったから、ここにいる方が幸せだったのです。しかし、大地さんは外に恋人もいる。休みなくずっと勤めることは難しいでしょう。温人さまは寝ている時間が長いですから、工夫すれば一人で世話することも可能です。新しい人と交代で休みをとったらいいでしょう。やめる時は、わたしが生きていれば、わたしが新しい人を探してまいります。だから、そんな先のことまで心配しなくて大丈夫。問題は、愛せるかどうかなのです」

今日までの3年、俺が作った料理をおいしいと言って食べてくれた温人さまを嫌ってはいなかった。不気味にも思っていなかった。しかし、それは接点がほとんどなかったからだ。ずっと一緒にいてどう感じるか分からなかった。

「愛は自然に湧き上がるものです。努力してどうにかなるものではありません。だからこそ貴重であり、だからこそ難しい。めぐり合わせ次第なのです。だから今夜会ってみることでいいですね」

「はい、文彦さん」

「以前は始終声が聞こえて食事もままならなかったのに、最近はずいぶん落ち着いていらっしゃる。きつとうまくいきますよ」

そう言い、微笑みながら文彦さんが、温人さまのところへ戻っていった。

とにかく会おう。会って自分の心確かめよう。そう決心すると、料理の仕上げに入った。

13 愛の喜び

(わたしを壊して)

わたしはつぶやいた。すると眠ったままの温人が表情を歪めた。そしてああと叫び声をあげた。

温人の声を聞きつけ、文彦が飛び込んできた。

「温人さま、どうなされたのです。怖い夢でも見たのですか？」

飛び起きた温人の上半身を抱き、文彦はゆっくり背中をさすった。

「エミリーが、壊してと言っている。こんなことは初めてだ。いやだ。でもそれが望みなら壊すべきなのか。分からない。わたしはどうしたらいい！」

温人はいつもわたしの声を聞いてくれる。そして願いを叶えてくれる。これで大丈夫。もう心配いらないわ。

「エミリーさまは本当に壊してほしいと言っているのですか？」

「あんなにはっきり言ったのに、文彦には聞こえないのか？」

「温人さまにだけ話しかけているのです。わたしには聞こえません」

「確かに言った。壊してと言った！」

文彦は親切だけど、わたしの声は届かない。温人だけがわたしの声を聞いてくれる。ああ、その温人がいなくなったら！

「床に振り下ろせば、確かに顔も手足も粉々に割れてしまうでしょう。しかしそうなったらもう二度と触れ合うことはできません。エミリーさまが望まれるからといって、温人さまは本当にそれでよろしいのですか？ エミリーさまがいない毎日に耐えられるのですか？」

「耐えられない。耐えられるはずがない」

「ではおやめください」

待って、わたしはどうなるの！

「しかし久しぶりにしゃべったのだ。よほど思いつめてのことなのだ。わたしの気持ちだけで決めてよいものだろうか？」

そうよ。魂を宿らせた責任をとって後始末をすべきよ。

「エミリーさまは、温人さまの人形なのです。温人さまが決めないで、誰が決めるのですか」

「だが、エミリーにも意志はあるだろう」

「温人さまの意志に反する意志なら、受け入れなくてもいいのです。そんなに悩まれるなんて、温人さまは優しすぎます」

人形は、人間の思い通りにならなければならないというの。そんなのひどいわ。わたしにだって心はある。

「しかし怒ったエミリーがこのままずっと話さなかったらどうする？ そんなの耐えられない！」

そうよ。願いが叶わないなら、もうしゃべることをやめるわ。ただのモノに戻りたい。

「愛し合っているもの同士でも、会話のない日はありますよ。いいえ、会話などなくても愛は変

わらず湧き上がるものです。違いますか？」

「わたしは答えて欲しいのだ。何でもいい。つぶやき返してほしいのだ。わたしを認めてほしいのだ」

「エミリーさまは温人さまただ一人のために存在しているのです。つぶやかなくても、触れられればそれでよいではありませんか。さあ、食事の前に大地に会いましょうね」

そんなのってないわ！

突然、ノックの音が響いて、初めてみる大地という青年が入ってきた。わたしは、最後の望みをかけて大地に頼んだ。

(そこのあなた、わたしを壊してちょうだい！)

しかし大地の耳にわたしの声は届かなかった。かわりに温人が叫び声を上げた。

「温人さま、どうしたのです！」

「わたしが願いを聞かなかったから、エミリーが大地に壊してと頼んでいる。そうだ。わたしにはできない。大地に代わりに壊してもらおう。しかしそんなことをすればエミリーがいなくなる。耐えられない。耐えることができない。文彦、わたしはどうしたらいい？」

「すぐに返事を返さないと怒り出したり、エミリーさまのわがままに振り回されるのはいつものことですが、壊してなどと、今度はひどすぎる。叱ってあげるべきです」

(人間なんかに残されるわたしの気持ちはわからないわ。叱るだなんて思い上がりもいいところよ！)

「文彦、やめるんだ。エミリーが怒っている。一人で残されることが不安なんだ。大丈夫だよエミリー。心配いらない」

どう大丈夫なのかわたしには分からなかった。機嫌を取るように髪をなでる温人の手がうっとうしかった。

声が聞こえない大地にとって、わたしはモノでしかない。そもそも温人がいなくなれば去るだろう。

大地にとってわたしはたかが人形であり、温人がそこまで執着する気持ちは分からない。そもそも大地に温人の世話など到底無理だ。

しかし、温人はわたしを壊すことができないと嘆く。

それじゃあ、わたしはどうなるの。独り静かにうすよごれて朽ちる運命なのよ。一人では何もできない。愛でられるだけの動かない人形。なぜ魂など宿らせたの。先に死んでしまうというのに。愛された記憶だけを支えに孤独にたえろというの。なんて残酷な人。物はモノとして扱うべきなのよ。同じ時間を生きられないのだから。

心を閉ざしたわたしの胸に、温人が手を当て、嘆き苦しむ。

「ああ、わたしも人形になり、エミリーとともに生きられたらどんなにいいだろう。しかし人間は人形になることはできない。だか死後は人形の体に魂を宿すことができるかもしれない。そのときこそ二人は一つになり永遠の愛に生きるのだ」

温人がそんな風に思っていたなんて知らなかった。わたしは一人じゃなくなるのね。朽ち果てるまで温人とともに生きられるのね。

「わたしの死後、エミリーを傷つけないように、大切に扱っておくれ。でもだからといってガラスケースに閉じ込めてはいけないよ。エミリーはさみしがりやでふれあいを望むから、一日に一度は抱き上げてほしい。優しくそっと髪をなでてあげて」

大地はわたしを愛さない。愛のない抱擁などいらぬ。でも嬉しい。魂だけになってもわたしのそばにしようというのだから。

たとえ大地が裏切り約束を守らなかったとしても、今の温人の言葉ですべて許せる。魂を得てよかった。肉体は滅びても、愛情は永遠なのね。それなら、たった一人のために生きるのも悪くない。いいえ、人形にとってこれ以上の幸せなどない。

「約束してくれ。わたしたち二人の愛を見守ると。若い大地の約束なら信用できる」

温人は大地の右手を両手で包み、床に膝をつき、深々と頭を垂れた。

大地は迷っているようだった。

どうかお願い。その人の願いを聞き入れてあげて。わたしたちのために。

「温人さま、わかりました。約束します。どこに行くことになっても、エミリーさまを一人にはさせません。必ず俺がお世話します」

「ありがとう。きっとエミリーの機嫌も直ってまたしゃべってくれるだろう」

感激して温人が何度もお礼を述べた。

文彦も安堵の表情を浮かべ、何度もうなずいていた。

(ああ、愛しい温人。あなたに会えてよかった)

「ほら、今、エミリーがささやいた。とても喜んでる。やっと返事を返してくれた。機嫌が直ってよかった」

温人はわたしを抱き寄せ、頬ずりした。

わたしは、チクチクするひげの感触を疎ましく思うと同時に愛おしく感じた。

夜になり、温人が布団に入ると、わたしを隣にねかせた。

文彦が布団をかけて、電気を消して出ていった。

「おやすみエミリー。また明日」

わたしに手を添え、温人は目を閉じた。

おやすみ。残酷で優しい温人。

わたしは温人の寝息を感じながら、長い夜を過ごした。